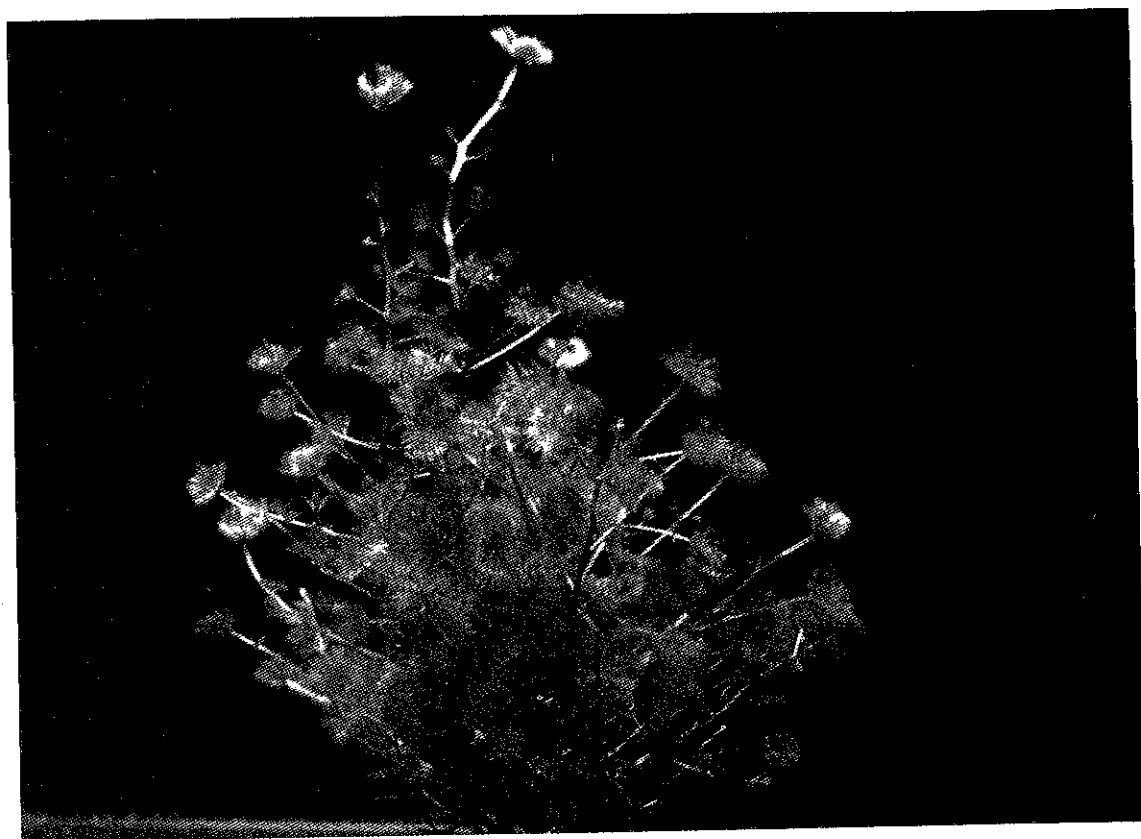


# 串本海中公園 マリンパビリオン

2002. 9

Vol. 31, No. 5



ケヤリ

*Sporochnus radiciformis*

円錐状の付着器から垂直に立ち上がる主軸は太さ 0.5 ~ 0.8 mm、多数の長い枝を各方面に出す。枝は主軸の上部になるにつれて短くなるので、全体の形は樹木を思わせる外観となる。枝はさらに枝分かれし、それぞれの枝の先に独特な毛の束をつけるが、この毛は平たく円盤状に広がり、水中では青い蛍光色を放つ。この毛の束を大名行列を先導をする「毛槍」にみたててこの名がある。色は褐色がかったオリーブ色。潮岬周辺の水深 10 ~ 15 m 付近の潮通しの良い岩礁上、転石上などに生育する。高さ 20 cm 以上になる。写真は潮岬北側海岸沖で採集したものを水槽撮影した。ケヤリモ目。

S. U.

## いそこじき (21)

## 串本初記録の魚5種の紹介

御前 洋

2000年4月に巻き網で混獲された1種と2001年12月にイセエビ刺し網に羅網した1種および、本年7月までに定置網で混獲された3種が、本州或いは串本で初記録の魚と思われるので報告する。またサケガシラの抱卵個体が釣獲されたので合わせて紹介したい。

スジズメダイ *Teixeirichthys jordani*

2000年4月19日、串本町上浦沖のキビナゴを対象にした巻き網漁で、体長73mmのスジズメダイ1個体が混獲された。本種の体色は淡黄褐色で眼の後方から尾柄部にかけて16条の濃青色縦線があり、胸鰭基部上方には眼と同大の1濃青色紋がある。上下顎歯は1列でほぼ円錐形であるが口部の奥にいくに従い歯は小さくなる。鱗は両眼間の前半から顎および眼前骨を除く体表、更に背鰭・臀鰭軟条部の基部および胸鰭基部と尾鰭前部にあり、縦列鱗数は44枚、また有孔側線鱗数は31枚で背鰭第8軟条下で終わる。主鰓蓋骨縁辺には円滑で2本の大きな棘、前鰓蓋骨の後縁と下鰓蓋骨下縁には多くの鋸歯、また間鰓蓋骨後部下縁には2個の鋸歯がある。本種の分布は高知県以南、台湾、中国となっておりところから、この度の1個体は本種の北限記録と思われる。

全長 95mm                      胸鰭 18軟条  
背鰭 13棘13軟条          臀鰭 2棘14軟条

イレズミニザ *Acanthurus maculiceps*

2001年12月21日、古座町津荷地先に仕掛けられたエビ刺し網に体長240mmのイレズミニザ1個体が羅網した。体は暗褐色で、頭部・頸部および胸鰭基部上方には多数の眼球大の橙黄色斑点が、また背鰭には濃緑青色の地に数本の赤橙色帯があるが、背鰭基底部は黒色帯で覆われる。また胸鰭は暗褐色を呈するがその上部後端には1黄色紋がある。上下顎の歯は扁平で、1本1本の歯は丁度手の指を揃えた様に先の丸い鋸歯状となっている。眼前には両眼を結ぶ3

本の橙黄色帯があり、鰓孔上端の後方（胸鰭基部上方）に長楕円形の1黒色紋がある他、尾柄部には濃青色をした可動な1棘がありそれを収める溝は黒色である。尾鰭基底には淡黄緑色横帯がある。尾鰭は湾入型で後端は白色に縁取られ、その上下端は糸状に伸びる。本種の分布域は琉球列島以南となっているが、池田博美氏によると1989年南部町で1個体（体長32cm）、また田名瀬英朋氏によると1992年白浜町で1個体が釣獲されているという。この度の1個体は紀伊半島3例目の記録と思われる。

全長 296mm                      胸鰭 16軟条  
背鰭 9棘24軟条              臀鰭 3棘23軟条

ミナミメダイ *Ariomma brevimanus*

2002年2月10日、串本町大島に設置されている定置網で、体長345mmのミナミメダイ1個体が混獲された。本種はサバに似た体型で細長くやや側扁し、吻端は尖らず丸い。眼の周囲は柔らかい脂肪組織（脂腺）で被われている。眼は小さく頭長の約1/4である。鱗は大きく剥がれ易い。頭部背面の有鱗域は左右の眼の後端から始まる。歯は小さくて細く、その先端は犬歯状に尖っている。本種の分布は四国、九州以南となっているが、1977年6月に三重県志摩町和具で体長348mmのものが手釣りされている（1995、鈴木他）。従って本個体は、紀伊半島では2例目（25年振り）の記録となった。

全長 390mm                      胸鰭 23軟条  
背鰭 10-1棘15軟条          臀鰭 2棘15軟条

キビレカワハギ *Thamnaconus modestoides*

2002年3月17日、串本町大島の定置網で、体長228mmのキビレカワハギ1個体が混獲された。体は側扁し、体表は絨毛状の微少な鱗で被われている。背・尾・胸・臀の各鰭はあるが腹鰭はない。また第1背鰭の基部にはこれを収める凹溝があるが、この溝は浅いために鰭は完全には収まらない。腰骨の後端には腹部から明瞭に突出する鞘状鱗がある。この鞘状鱗は2節からなるが不可動である。本種はウマヅラハギに似るが、ウマヅラハギの第1背鰭棘は眼の後半部上方に位置するのに対して本種のそれは眼

の中央上方に位置すること、また前種の鰓孔は眼の中央下に位置するのに対して本種のそれは眼の前半部下方に位置することで、区別出来る。本種の分布は小笠原諸島、琉球列島、インド、西太平洋となっているが、紀伊半島ではこれまでに1992年白浜町瀬戸（田名瀬英朋氏、私信）と白浜町椿（岡村他、1997）の記録がある。この度の1個体は紀伊半島3例目の記録と思われる。

全長 228mm 胸鰭 13 軟条

背鰭 2 棘 36 軟条 臀鰭 34 軟条

#### アラレフグ *Arothron caeruleopunctatus*

2002年7月15日、串本町大島の定置網で、体長510mmのアラレフグ1個体が捕獲された。体色は灰白色の地で、眼の周囲には同心円状の淡青色と褐色線が交互に3本ずつある。腹部を除く体全体および背・臀・尾鰭には淡褐色に縁取られた直径3～5mmの淡青色点が多散在するが、胸鰭軟条部にはない。眼から尾鰭基部にかけての体背面に3～5mmの楕円状の褐色点が多散在（約70個）する。胸鰭基部上・下縁と肛門周縁にそれぞれ眼と同大の黒色紋が1個ある。また体表の各鰭基部および口部周辺以外には多数の小棘が散在する。上下顎歯は融合シクチバシ状になっている。鼻孔は左右1個で筒状になって開口し、その先端は2葉に分かれている。本種の分布は鮫子、太平洋・インド海域に広く分布するとあるが、串本では初記録である。

全長 605mm 背鰭 12 軟条

体高 220mm 胸鰭 17 軟条

体幅 120mm 臀鰭 12 軟条

尾鰭 7 軟条

#### サケガシラ（抱卵個体）

2002年1月15日、和歌山県古座町田原沖、水深500mの熊野灘からアコウダイの深海一本釣りで、体長2470mm（尾鰭欠損）のサケガシラ1個体が捕獲された。捕獲当日、漁師より「生きている」という連絡が入り港に受け取りに出かけた。船の生け簀から毛布に包んで取り出し水族館に搬入したが、水槽内で泳ぐこともなく、

約30分後に死亡した。本種の前進時の遊泳方法は、扁平な魚体全身をウナギ型魚類のようにくねらせるのではなく、背鰭の波動状運動に合わせるように体高の上1/4位までが波動状を呈すると言われている（柳沢、1986）が、今回はこれを確認することが出来なかった。

なお、総排泄口から卵が放出されたため、腹部を切開し卵巣を精査した。その結果以下のことがわかった。①卵巣の全周から卵巣内側に伸びた多数の卵巣薄板があり、卵巣中央部には空洞部（卵巣腔）が認められたことから、本種の卵巣は内卵巣腔型卵巣である。②流出卵は無色透明の分離浮遊卵で、油球はない。卵径は2.41mm（計測卵数20粒、最大2.43mm、最小2.28mm）であった。③卵は卵巣腔内、卵巣薄板の表面と内部で多数確認された。卵巣腔内および薄板表面に付着している卵の多くは流出卵とほぼ同径であるが、薄板表面に付着している一部の卵は卵径2mm以下、また薄板内部のものは1mm以下と卵が小さく、未熟卵と思われる。従って分割産卵の可能性が示唆された。④重量測定の結果、流出卵および卵巣薄板から分離していた卵数は約100,000粒、薄板表面および内部の卵数は約200,000粒と推定された。これまで本種に関する卵の情報は余りないと思われるのでここに紹介した。

本種は北海道太平洋岸から高知県沖、沖縄県沖、日本海に分布し稀に沿岸域に漂着するとされるが、駿河湾ではアコウダイの深海延縄で時々混獲される、また本個体を釣り上げた漁師の話では年に数尾は釣れるという。

体長 2470mm 胸鰭 i+12

脊椎骨数 75 尾鰭 欠損

背鰭 166+軟条 卵巣重量 2420g

（後部欠損）

和歌山県白浜町や南部町の情報を提供して頂いた白浜水族館の田名瀬英朋氏、熊野高校の池田博美氏に感謝します。

なお各魚種の分布については、日本産魚類検索 全種の同定（中坊他、2000）を参考にした。

### 第29回マリンスクール開催

恒例のマリンスクールが今年も 8 月 5 日～7 日に行われました。今年は例年になく猛暑で先生の方がバテ気味でした。以下は、子供達を書いた感想文です。

#### 三尾川小学校 5年 永楽 直子

一日目のテントをはるとき、他の学校の人達が、やさしく「いっしょにやろう」と声をかけてくれたのがうれしかったです。その一言で、私はすごく自信を持てました。飼育体験は、初めてなので、ちゃんとエサをあげられるかな？とドキドキしていたけど、けっこうかんたんでした。魚のすり身をジュースにしてやるやり方は知りませんでした。飼育体験の次は夕食のカレーを作りました。私はかまど係でした。自分で、木を入れたり、火のかげんをするのは、初めてでした。なかなか最初は、あつくて、木を入れることも限界でした。でも、と中からは、なれてきて、ちょっと火に近づけるようになった。できあがりのカレーはすごくおいしかったです。あと、海の映画を見たあと、スイカわりをしました。スイカわりは、みんなめっちゃくちゃでおもしろかったです。私はスイカをわれたので、うれしかったです。その日の夜は、あまり眠れませんでした。

二日目の朝食は、トン汁でした。朝食なのに昼食の様でした。二日目は、マリンスクールの中で一番楽しみにしていた、磯の観察でした。昼食を食べて、休けいしてから磯へ行きました。ヤドカリをさがしました。みんなでもぐってさがすのは、楽しかったです。私はヤドカリのひっこしを一しゅん見れたので、うれしかったです。そのあと、帰って来て、夕食を食べたあと、ヤドカリの種類などを、調べました。イソヨコバサミと、ホンヤドカリという種類がありました。調べ終わったあとは、キャンプファイヤーをしました。ゲームは、きもだめしをしました。こわかったのは、仕かけのカ～ンという音だけで、先生がおどろかしてきたのは、おもしろか

った。きもだめしが終わったらねました。二日目は、ねむたかったので、よくねむれました。

三日目は、ウミガメの放流をしました。中くらのカメと、小さい赤ちゃんガメをステラマリスから、放流しました。両方のカメ、すごくかわいかったです。海の中の魚もかわいかったです。放流が終わったあと、「あーもうマリンスクールも終わりか…」と思いました。

#### 出雲小学校 5年 福島 愛歌

一日目に魚にえさをあげたのが楽しかった。この人たちはいつもあんなえさをあげているんだなと思いました。夕食を自分たちで作ったことがなかったので不安だったけど、上手においしくできたと思いました。二日目の朝食だっておいしかったし、昼食だっておいしかったし夕食だっておいしかった。今日の朝食はサイコーにおいしかった。スイカわりの時けいちゃんがだまされて地面をたたいてしまったのがおもしろかった。

二日目の磯の観察は話だったので少しねむたくなってしまった。昼からの磯の観察は楽しかった。でも三匹しかとれなかった。夜のキャンプファイヤーできもだめしをした。こわそうと思った。ほんとにこわかった。

三日目のウミガメの放流は、少しかわいそうだった。すべるあの板の上でコロコロころがっていつてしまった。少し大きくなったカメも水の中に入っていった。元気でねと思いました。海の底を見るために下におりました。すごくきれいだった。今年のマリンスクールは今日で終わりだけど、また来年来たいと思います。



磯でヤドカリのひっこしを観察

## デバスズメダイとアオバスズメダイ

小寺 昌彦

串本ダイビングパークのスタッフから鯖浦地先にデバスズメダイが群れで出現したとの情報が得られた。デバスズメダイと言えばサンゴ礁を代表する水色の小さなスズメダイ類で、枝状ミドリイシ類に群れて、敵が近づくと枝間に隠れる姿を、八重山でよく見かけた魚であった。このデバスズメダイについて鯖浦地先で得られた標本を元に簡単に報告する。また、これに類似するアオバスズメダイも4年前に標本が得られていたことを合わせて報告する。

デバスズメダイ *Chromis viridis*

生息状況を確認しに行くと、情報通り水深約5mのところにあるクシハダミドリイシ群落上を30個体ほどの群が泳ぎ回っていた。見慣れている枝状ミドリイシの枝間に隠れる姿とは異なり、近づくと逃げ回った。その後、短い枝のミドリイシ類に近づき、枝の隙間に入りし始めたので、写真(図1)を撮影した。

得られた標本は2cmほどの2個体で、標本や撮影された画像、海中での観察でも胸鰭腋部の黒斑は確認できないことから、これらの群れは全てデバスズメダイであると思われた。

アオバスズメダイ *Chromis atripectralis*

1998年9月、鯖浦地先にある水深3mほどのクシハダミドリイシ小群落で、10個体ほどのソラスズメダイ群に混じっている薄い水色のスズメダイ類の幼魚を発見した。デバスズメダイと思われたが、標本の胸鰭腋部に小さな黒斑があることから、アオバスズメダイであると思われた。

その後、鯖浦港内にも胸鰭腋部に黒斑が見られる2個体が出現したが、この2個体はしばらく

して姿を消した。

さて、3個体の標本の各部の計測データを表1に示した。計測データから、胸鰭腋部の黒斑以外にも胸鰭軟条数、臀鰭軟条数からそれぞれのスズメダイ類に見合った数値が得られ、予想通り2002年のものがデバスズメダイ、1998年のものがアオバスズメダイと同定された。なお、4年前のアオバスズメダイ標本では胸鰭腋部の黒斑がやや薄くなり、判別が難しくなりつつある。両スズメダイの分布は、柏島での記録が北限とされており(平田ほか1996)、本州初記録と思われる。

9月上旬現在、鯖浦地先のデバスズメダイは約20匹と約30匹の2つの群が確認されている。岸から潜っていき、通常のコースを泳いでいけばほぼ確実にどちらかの群に出会える。夏休み中に岸から潜った人々はこの珍しい南からの来訪者の群を楽しむことができたに違いない。

これまで本州で未記録と思われる様々な魚類に出会い、記録をとってきたが、南方からやってきた新参者は普通1個体で他の(近縁な)魚類の群に混じっている場合が多く、今回のように数十匹の群で見られた例は非常に珍しいものと思われる。冬の低水温を乗り切って、成長した姿を見せて欲しいものである。



図1. デバスズメダイの群れ

|         | デバスズメダイ2002年標本 |      | アオバスズメダイ<br>1998年標本 | デバスズメダイ   | アオバスズメダイ     |
|---------|----------------|------|---------------------|-----------|--------------|
|         | 大              | 小    |                     |           |              |
| 胸鰭腋部黒斑  | 無              | 無    | 有                   | 無         | 有            |
| 胸鰭軟条数   | 17             | 18   | 19                  | 17~18(18) | 18~20(19,20) |
| 臀鰭軟条数   | 10             | 10   | 9                   | 10~11     | 9~10         |
| 全長 (mm) | 21.6           | 17.9 | 33.8                | -         | -            |

表1. 採集した2種のスズメダイ類の各部計測値

注) 胸鰭軟条数の括弧内数値は通常値

**夏季実習生思考****串本のサンゴと生物多様性****富山大学大学院理工学研究科修士1年****原本 真二**

串本の海でみられるサンゴの種数は約 100 種、この数字は日本沿岸、特に本州沿岸としては非常に高い値である。勿論、串本ではサンゴ以外の生物においても非常に多くの種をみることができる。それでは何故、サンゴの生息する空間には他の生物種も多様に存在するのか、少し考えてみたい。

まず、サンゴが生育する環境条件が、他の生物種にも適していることである。サンゴは水質がきれいな海水中にしか生息できない。これは、サンゴ体内の共生藻が光合成を行うため、太陽光の透過率が高い水質を必要とするためである。従って、サンゴが生息できる環境は他の生物にとっても優良な環境であり、サンゴの周りには自ずと多くの生物種が集まる。

次に、サンゴ自身が複雑な生態の場をもたらすということである。サンゴの多様な骨格は、海底に非常に複雑な基質を造形する。これは、日本沿岸で最も多く見られる砂礫や岩礁の底質と比較すると、生物体量（バイオマス）を受け入れる場として非常に優れている。その具体例として、水族館内にも展示されているサンゴに共生する生物が多いことが挙げられる。サンゴの枝間に住むサンゴガニ類や、カクレエビ類など、サンゴが生み出す生態空間に住むものは多い。このことは、サンゴという生物が「種の多様性」のみならず、「生態の多様性」を豊かにさせていることを意味している。これらのことから、サンゴは生物多様性を示す指標でもあり、また生物多様性自体を創出していると言える。

ここまで串本の海は生物多様性に富む貴重な生態系を垣間見させてくれるということ述べてきた。しかしながら、海中生物を見るには、海中を泳ぐ必要があるし、生物によっては、危険を伴う深い場所に生息するものもある。串本で見られる生物を展示している串本海中公園セン

ターは、私達に、豊かな生物多様性と興味深い生態を分かりやすく、わざわざ海中に出向かなくとも大気中で観察することを可能にしてくれている。

**稚サンゴの給餌について****東海大学海洋学部水産学科2年 岡村 和弥**

実習の一環として稚サンゴの給餌の仕事を頂きました。この稚サンゴの大きさは約 1mm。7月 10 日に大水槽内のクシハダミドリイシの産卵によって得られたもので、ホタテガイの貝殻に付着しています。

給餌の基本的な作業は、冷凍アルテミアの幼生から尾と肢を切り落として、稚サンゴの口に落としてやることです。この際、尾と肢をしっかりと切り落とさないと、稚サンゴが餌を拒絶してしまいます。正確な理由はわかりませんが、肢のような出っ張りがあると、飲み込みにくいのではないのでしょうか。もう一つ留意点があり、餌を口に落とす際、稚サンゴに大きな刺激を与えないことです。柄付き針が触手に触れると、触手は閉じてしまいます。閉じている間は餌を落としても稚サンゴは餌を拒絶するので、一度触手が閉じると、もう一度触手を広げるまでのしばらくの間、作業が中断されてしまいます。

餌を食べる様子は「通った獲物を掴み取る」という積極的なものではなく、「たまたま落ちてきた餌を吸い込む」といった感じです。このことは稚サンゴの触手の物をくつつける力が弱いと関連していると思われます。実際、触手の先端より餌を落とすと、餌の重みに負けて餌を落としてしまうことがありました。以上のことから、自然界で、稚サンゴは動いている生物を捕食するのではなく、プランクトンの死骸などが波などによって細くなった物から栄養を得ているのではないかと私は考えています。

クシハダミドリイシの稚サンゴへの給餌は、初めて行う作業が多く、なかなか思うようにことは運びませんでした。しかし、この作業は、日常生活の中ではおろか、通常的水族館実習でさえなかなか経験できないものであり、非常に興味深いものでした。今回の経験から得たもの

を今後行う卒論等の研究作業で生かして行けたらと考えています。

### メリベウミウシの観察

水産大学校生物生産学科2年 熊本 修太

私はウミウシ類に興味があり、潜る機会がある時はウミウシ類を探すようにしていた。スノーケリング中に、海底の石を裏返してウミウシはいないかと探していると、石を裏返した反動で舞い上がった砂利の中に体をくねらせている生物を見つけた。捕まえて、図鑑で調べると、メリベウミウシのようだった。

メリベウミウシは節足動物を捕食することが知られているので、ヨコエビ類を与えて、しばらく観察してみることにした。以前飼育されていた近縁種であるヤマトメリベ（本誌Vol. 29, pp. 32-33など）の捕食方法と比較すると違いがあるようである。頭巾状の頭部を投網状に大きく広げ、餌を包み込むように食べることに違いはないのだが、本種はヤマトメリベのように遊泳中には捕食しないようだ。本来、ヤマトメリベの様に遊泳性の強い生物ではないらしい。確かに時折見せる遊泳中の姿は、好んで泳いでいるというよりもがいているように見える。

さて、1個体のヨコエビ類が本種の背突起上に降りたとき面白い行動が観察できた。頭巾状の頭部を曲げて自分の背突起にもっていき、ヨコエビ類を捕食したのだ。ヨコエビ類が背突起上に降りた時にこういった行動が何度か見られた。そこで本種は海藻に擬態した背突起で、そこに隠れようとする餌の節足動物を集めているのかもしれない考えた。多くのウミウシ類は海綿類や海藻類など、動かない生物を捕食するものが多らしい。本種は節足動物を捕食するので、より効率を良くするために海藻のような外見をしているのかもしれない。

短期間であるが、1種の生物を観察していくつかの不思議を見つけることが出来た。今は簡単な考察だけで終わりだが、卒論などでまたメリベウミウシに出会い、この考察が本当なのかどうか、より信憑性のある文章に出来たら良いなと思った。この夏季実習に参加して、生物をい

ろいろな角度から見る事を学び、生物に対する興味がより湧いてきたと思う。

### 展示生物への給餌と実習の感想

日本海洋科学専門学校生物生産学科2年

山口 徹朗

ぼくがこの実習で最も興味深かったのは飼育生物への餌やりでだった。水槽ごとに餌の種類、与え方、与え方のコツが違うので最初は覚えるのに苦労したが、毎日餌をやっているという思うことがあった。

とくに印象的だったのはアンボイナに餌をやった時である。アンボイナが数匹収容されている水槽に餌の死んだキビナゴを3、4匹放り込んでやると、水槽の隅で何匹かで寄り集まってじっとしていたアンボイナが、餌のにおいを嗅ぎつけたのか口をラップのように大きく広げながらゆっくりと餌を探し始めたのである。ぼくが知っていた「餌となる魚に毒のある歯舌を射ちこんで捕らえる捕食方法」と大幅に違っていたことに大きな衝撃を受けた。

また意外だと思ったことは、ウニ水槽で展示されているウニの中でノコギリウニやアカウニがワカメなどの海藻のほかに魚の切り身まで食べていることであつた。しかし、よく考えてみると同じウニの仲間であるガンガゼは時には他のウニまで食べてしまうので、別に魚肉を食べるウニがいてもおかしくはないと思い納得した。

この長期間の実習の中でけっこういろいろな水槽の餌やりを経験していて、1度だけ痛い思いをしたことがある。ぼくは博物館実習に来ていた前任者から大水槽の魚への餌の与え方を大まかに教えてもらったので、大型の魚に魚のミンチを水面で細かくほぐして与えていたのだが、それがそもそもの間違いだった。ミンチをつつきに水面まで上がってきたソウシハギに思いつきり指を噛まれてしまい飛び上がりそうなくらいに痛かった。それ以来、しばらく水槽に手を入れることができなかった。

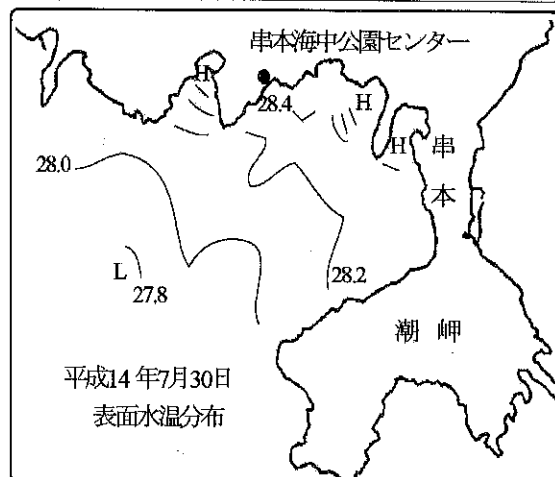
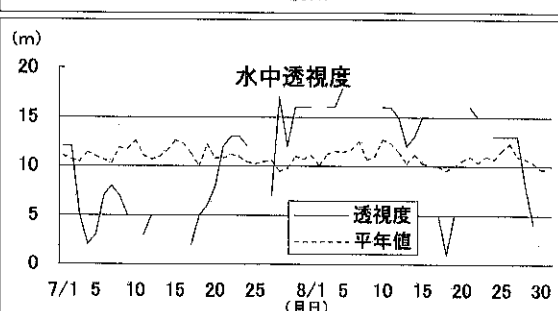
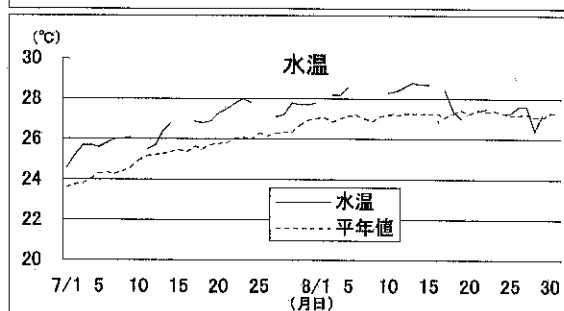
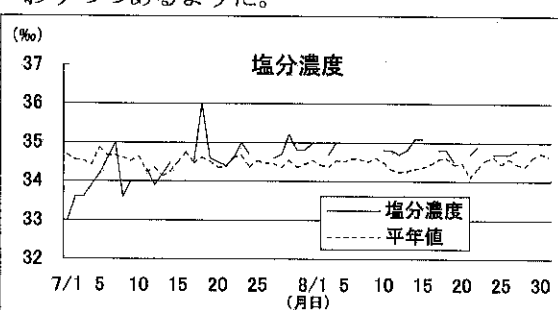
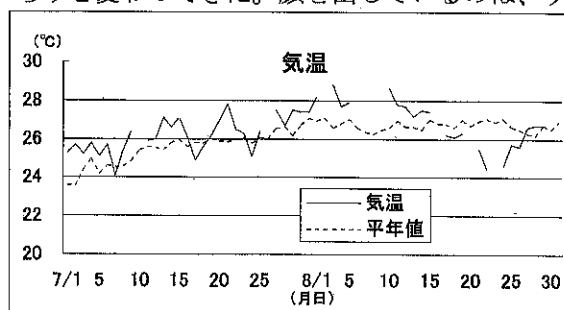
いろいろあったけど充実した1ヶ月と10日間だった。

# 鯖浦の海から 宇井 晋介

|     |    |         |         |           |            |
|-----|----|---------|---------|-----------|------------|
| 平均値 | 7月 | 気温26.2℃ | 水温26.6℃ | 塩分濃度34.4‰ | 水中透視度 8.5m |
|     | 8月 | 気温26.8℃ | 水温27.9℃ | 塩分濃度34.7‰ | 水中透視度12.1m |

ウツボは串本名物「ウツボの佃煮」として有名で、串本ではどこにでもいる魚だが、このウツボに最近ちょっとした異変が起こっている。防波堤の土台を固めている石を張り石という。防波堤の根本の部分にこの張り石を石垣の様に施す事で、土台が波の力で浸食されないようにするものだが、この石の間には隙間がたくさんある。穴蔵を好むウツボにとっては格好の住みかなので、以前はどこでもたくさんのウツボが顔を出していた。ところが最近その顔ぶれががらりと変わってきた。顔を出しているのは、ウ

ツボはウツボだが本当のウツボではなく、大半が全身に黒点のあるニセゴイシウツボなのだ。ニセゴイシウツボは本来南方種で沖縄辺りでは普通種だが、鯖浦では10年ほど前まではごくたまに見かける程度の魚であった。ところがここ数年ですっかり様変わりし、ウツボを捕獲するカゴを仕掛けても、入るのはこの新参者ばかりで、本物のウツボはやや深いところに行かないと入らなくなった。海が暖かくなっているせい、魚たちの世界も目に見えて変わりつつあるようだ。



## マリンバビリオン Vol.31, No.5 通巻365号

年6回発行 一部100円

(年間購読料1,000円/送料含む)

印刷日 平成14年9月25日

発行日 平成14年9月30日

郵便振替口座番号: 00990-9-41351

口座名称: 串本海中公園マリンバビリオン

## 編集兼発行人

〒649-3514 和歌山県西牟婁郡串本町有田1157

(株) 串本海中公園センター

電話: 0735-62-4875 FAX: 0735-62-7170

<http://www.kushimoto.co.jp/>

印刷所 坂本印刷